影の時を統べる、救世の王

K氏

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

――『己の身を犠牲にして、人類を死の運命から救う』。そういった点では、彼は紛れもなく、『救世主』だった。

数多の人々との絆により、何者も到達する事の無かった『宇宙』に……『命のこたえ』に辿り着いた。

しかして、少年の偉業は、ほんの一握りの人間にしか知られる事がなく。

一度世界を救っても、再び時は巻き戻り、同じ時をやり直し、また人知れず世界を救う『作業』に戻る。

――だから、男から『時を統べる王の力』を渡された時、少年は決心した。

「今度こそ、俺は俺のやりたい事をやる」

「俺は、幸せになる」

「そして――今度こそ、彼女を一人にしない。ずっと傍にいる」

――これは、人が救世主になる、愛と勇気の物語ではない。救世主が人に成り下がる、愛と欲望の物語である。

目　次

リバイブ／愚者の刻

――はたして、何度この光景を見て来ただろうか。

眼前には惨状。トラックは横転、炎上。一般的な乗用車は言わずもがな。乗っている人々に関しても、何も言うまい。口にする事すら憚られる。

橋を構成するアスファルトは無残にも砕け散り、何かしらの金属の破片が飛び散り、明らかに事故のそれではつかないであろう、銃弾の痕が残っている。一人の少年が体験していいものでは決してなく、しかしこの世界のどこかで必ず起きている、そんな惨たらしい事故現場。

――否、それが単なる事故ではない事は、彼自身がよく知っている。

〉……ああ。またか。またなのか

少年は、虚ろな目を彷徨わせ、そこにいるはずの『少女』の姿を求める。

既に死んでいるであろう父でもなく、まだ少しだけ息がある母でもなく。彼はただ一人の少女の姿を求めた。

既に彼の感覚は、麻痺しきっていた。何度時間が巻き戻っても救えない両親の事は、もう仕方がないと諦めてしまっていた。そんな調子でも世界が救えてしまうのだから、少年は自らのそんな醜い部分を、とりあえず脇に置いておく。

……世界を救った？　本当に？

いつだって、そんな疑念が頭をよぎるが。

そんな疑念を頭から無理矢理おいやり、視線を巡らせ――

「おや、ここにおられましたか」

――何故か、見覚えのない男が目に入った。

「――ゅ――」

「おっと。喋るのはよした方が賢明でしょうな。今の貴方は力を持たぬただの幼子。

その様子では、喉をいたずらに痛めるだけでしょう」

全身群青色という異彩さで際立つその格好は――幾分か改造されているようだが――所謂司書と呼ぶに相応しい、洗練されたものと言っていいだろう。そして何より目を引くのは、男が手にした、男の格好と同様の色合いの、やけにぶ厚い本。

このナリで普通の図書館にいたならば――その整った容姿も相まって――瞬く間に有名人になる事だろう。

「さて。ようやくこうしてお会いできたのです。まずは簡潔ながら自己紹介をば。

私の名はウォズ。ご覧の通りの……語り部でございます」

〉……語り部？

少年は頭にクエスチョンマークを浮かべるが、その疑問が喉から出る事はない。

「では、早速本題に。……貴方が何を為したいのか、それをお聞きしたい」

そう問われ、一瞬、心臓がドクリと脈打った。

「ああ。口を開く必要はありません。私（わたくし）、こう見えても読心術が使えまして」

〉それは聞いてない。

「そうですか……得意技の一つなのですが……まぁ、いいでしょう」

何故だか妙に悲しそうな仕草をするのが、なんというか、鼻につく。

兎にも角にも、少年が為すべきと思った事を、頭に思い描く。

「……はぁ」

〉何故か溜息を吐かれてしまった……。

「……いえ。どうも、言い方が悪かったようで。ならば、こう言い換え

ましょう」
――貴方の望みを仰りなさい。
『望み』。そう言われた少年は――思わず目を見開く。
〉……何を知っている。
「この本に書かれている事であれば、全て、余すところなく、といったところでしょうか」
そうして、群青の司書は得意げにその本……『Ｕｎｉｖｅｒｓｅ Ａｋａｓｈｉｃ Ｒｅｃｏｒｄｓ』と題された本を掲げる。
「この本によれば、貴方は実に４７回にも及ぶループを経験している……間違いありませんね？」
〉……今更数えきれるか。
「おっと。それもそうですね。これは失礼をば」
そう言いながら、ウォズはわざとらしく、仰々しく頭を下げる。
「オホン。さて、貴方はそのループの中で、幾度となく世界を救われた。それも間違いありませんね？」
〉……ああ。
自分で言うのもなんではあるが、しかし事実だ。少年は、何度も世界を救った。己の身を犠牲にして。
究極の自己犠牲。人身供物。それを、少年は、他ならぬ自分の身でそれを繰り返し続けた。
「それだけ確認できれば。……なるほど」

「世界を救った者とは思えない程に、貴方は人間臭い」

〉……何を、言っている。
少年は眉をひそめた。
「いえ。ただ……この本には、貴方の為してきた事が網羅されている。この意味がお分りでしょうか？」
そこまで言われて、少年はようやく、先程のウォズの言葉の意味に

気づいた。
〉……待て。二股は不可抗力だ。
「二股どころではなかったとありますが」
思わず耳を塞ぎたくなったが、重傷を負った今の体を、そんな事の為に動かすのが億劫で仕方がない。
「まぁ、そんな事は些末事に過ぎません。重要なのは、貴方が人並みの願い、望みを持っている事。それに尽きます」
心臓がまた、ドクリと脈打つ。
「そして、その望みを叶える手段（チカラ）を、私は貴方に与える事が出来る。
……ただ一つ、契約を結びさえすれば」
また、ドクリと脈打つ。

「さすれば、貴方は己の幸せを勝ち取る事が出来る……いえ、こう言いましょうか。」
――永劫に先に進む事のない彼女との時を、進められる。
契約。その言葉の重みは、良く知っている。ある意味で、彼は契約によって運命を縛られているのだから。
だから――その内容が、とても甘美なものに思えて。
〉……分かった。結ぼう、その契約。
一瞬の間を置いて、彼は迷いなく、その提案に乗った。
本来ならば、未来で結ばれるはずだった契約を蹴り、新たな契約を選んだ。
「貴方なら、乗って下さると思っていましたよ」
群青の司書の口元が弧を描いた。
これはきっと、悪魔との契約のようなものなのだろう。そういう契約は、タチが悪いと相場が決まっている。
だが、元より少年は、死神と契約していたようなもの。なら、今更悪魔と契約したところで、大して違いはないだろう。
成熟した――あるいは摩耗しきった――少年の精神は、いとも簡単に、あっさりと、その忌避感を乗り越えてしまった。

「では――これを」
そうして、ウォズがどこからともなく取り出したのは、黒い何か。
近くで見ると、それは丁度、今の少年の握り拳ぐらいはある、懐中時計のようなものだった。
「使い方は……まぁ、貴方ならすぐ分かるでしょう」
〉……初対面の筈なんだが。
何故か妙に信頼されているというか、ある程度の信用を得ているらしい。
が、この男に何故を問うたところで、どうせはぐらかされるだろうと、少年はこれまでの経験からそれを察していた。
事実、この胡散臭い司書は、ただニコニコと仮面のような笑みを浮かべるだけ。
だから――とりあえず、少年は心の赴くままに、その懐中時計めいた何かを手に取った。
そして、それをよく見ようと自分の方に向けると同時に、光の針が時計の表面をグルリと回った。まるで、少年が手に取った事で歯車が動き出し、時を刻みだしたたかのように。
光が一周すると、懐中時計が眩い光を放ち――黒いボディはそのままに、表面に何かが描かれだす。
察するに、何かの顔だろうか。
横向きになったその眉間には『カメン』という文字が。
その下には、『２００９』という数字が刻印されている。
それは、少年にとってあまりにも縁の深い数字。
〉……こいつは。
「貴方の知る仮面の力と、似て非なるもの。
貴方のそれが集合的無意識……心の海から出ずるものなら、
これなるは長き歴史から出でしものにして、仮面の戦士に纏わる歴史そのもの」
そして！　と、ウォズは語気を強くする。
「――そのウォッチこそは、時を統べる王者、『ジオウ』の歴史を内包するもの！

彼の者に支配できぬ時は存在しない！　……ですが、問題がありましてね」
唐突に落ち着いた様子に戻り、テンションの違いに少年は少しばかり調子を狂わされてしまう。
だが、その後に告げられた『問題』の内容を聞き――少年は納得する。
〉……大体わかった。
「おや。察しがよろしい。流石は――」
〉御託はいい。それで？　契約書はいらないのか？
「いえ。そのようなものは必要ありません。
貴方はただ、そのウォッチを起動するだけでいい」
そう促されるままに、少年は懐中時計……『ライドウォッチ』の上部にあるスイッチ、ライドオンスターターを押す。
『ＺＩ―Ｏ！』
渋い男の声がウォッチから発せられ――瞬間、ウォッチから溢れ出した『影』が、少年を包み込んだ。

――普通の高校生、『常盤ソウゴ』。彼には魔王にして時の王者、『オーマジオウ』となる未来が待っていた。
――……が、これより語られるは、彼の御方の王道が語られる物語ではございません。
――言うなれば、これはそう、外伝。『影』の物語。
――とは言え、全てにおいて関係のない話ではありません。これは紛れもなく、『オーマジオウ』が抱える歴史の一部。
――さぁ、さぁ、ご覧あれ！　これより始まるのは、一人の救世主が、唯の人へと成り下がる、悲劇にして喜劇の物語！
――影の王となりし救世主の未来に待つもの、それは……おっと。これから先は、未来の出来事でした。